

### 健康相談部の設置

飯田 澄美子

私は、昭和31年に公衆衛生看護の助手として赴任したが、健康相談部の活動は大学教育のなかで、よく看護教育のなかに必要な分野であるとして、その開拓が待たれていた。専任主任教授であった飯田邦三先生が、健康相談部長兼兼務され、橋本美子先生がその部に当たられていた。健康相談部は健康相談については医者が行なうものと考えられており、各科部長の推薦打合せを協議が数回開かれていたが、飯田部長が相談を行なうことについて容易に了解がつかず、ひとまず、試みとして専らせられて、部長の依頼で、了解されたと聞いていた。

健康相談部には創立した部長がなく、総務長(相原トモ)室の一室を利用して行っていたが、間もなく山下室の廊下で、つい立てでもしきりなし、机の上と椅子とで相談を行なうことになった。ケース、ロールの山田川田川といく人とも相談にあつた。

私は御密達から山向き、月、水、金の午前中の身であったが、山田さんは1日申々の場面で相談に当たり、悪い寒風が廊下を吹き抜け、凍はしもやけができて、赤くはれあがっていたことを命でも忘れることができない。その後、しだいに相談盛況加つて、利用する患者・家族が増して来た。また、健康相談事務の延長業務として、家庭訪問、職場訪問によるプログラム、ケア、リハビリテーションの指導を中心とする相談が急増した。担当医師と密接に連絡をもち、指示を受けた。家庭訪問の状況について記録し、担当医師と密接に連絡をもち、指示を受けているうちに、このような仕事は、医師の診断にも役立つものがあるとして、医師にはできない内容を含んでいること、などが認められるようになって来た。

しだいに医師の認識が深かり、協力して理解が深まるようになった。当時健康相談部が研究をやることとはほとんど考えられず、つまり方から導入された看護も「ワカ」(技術)が中心であった。飯田邦三先生から、「20年先の社会は救急看護を、今、研究し、創造していくことが大切である。今までのような方法を捨てなさい」といわれ、衛生看護学科のユニークさを世の中に認めようというためには、研究をして、その実績を認めてもらうことが何より大切なことであると強く物こわした。

看護, 1984年12月号

当時は、看護部は身体を助かし、気がきいて、健康が保たれればよい、とされていたので、研究で研究を行なったり、研究的とりかみをするなどなご考えられなかった。多くの同僚から何をしたいのかとつめよられたり、施す間を多く授けかけられたものである。言葉の通じない思いを、「20年先の看護を」めざして「着ろまい、見まい、聞かまい」と心に秘めて、ひたすら学ぶことだと誓っていた。

相原に設立の健康相談とは何かを尋ねるとき、その方法が未開拓であり、当時、教育界では、ガイダンス、カウンセリングという言葉が、新聞、教育雑誌には出はじめであり、悩みをもつ相手の気持ちがおかしくなれば、仕事にはならないと考え、この内容を学び、方法を導入したいと考え、それらを学び実行した。特に、健康機関における相談事業の内容について、衛生看護学科公衆衛生教育の講師清水、田中恒男の両先生の協力があつた。また、労働医局による健康のための実行委員組織がつくられた。委員長には、次期の専科長であった塚原先生があつた。労働の医師のメンバーのなかに若川中先生、土川先生もあつた。

相談活動としては、医学ではあまり問題としていない睡眠状態をもつた人、疾病とまではいかない身体不調をもつた人、社会心理的困難をもつて病室に閉じこめられた人、生活の困難、精神的苦痛、カウンセリングによって、友人の援助を受け入れ、協力し、健康生活の途程にわたつて、気が配つた。

1人1人の相談・支援活動を進め、評価して、学会に報告した。しだいに相談部を利用した人々から、医師に相談するより相談しやす、話しをよく聞いてもらえて、自分ができるように行動すればよいかわかった、専門医とよく連絡をとつてくれ助けた助言が得られた、病室らしくなく気持ちがあやうな気分のもち方が変わった、自分の悩みを真剣に聞いてもらって総合的に問題を判断してもらった、等の感想が得られるようになった。

開設5年後には、病室の各科医師の集談会に呼び出しを依頼され、特別に時間を割いて内容報告する機会が与えられた。病室には、衛生看護学科の指導業務を担っていた小松太刀夫先生であったが、さうそう、夜間の別の病室に、患者さんがよく利用できる場所以と相談室が与えられた。

病院としては、各科外来と並んで必要部門として位置づけられ、常勤者が採用されることになり、その後衛生看護学科の卒業生が採用された。  
(健康相談部看護)